

2022 年 10 月 30 日
年間第 31 主日
菊地功大司教 メッセージ

ルカ福音はザアカイの話を記しています。先週に引き続き、徴税人が主役です。

教皇様は 2016 年 10 月 30 日のお告げの祈りで、この話を取り上げ、次のように述べておられます。

「人々はザアカイのことを、隣人のお金を使って金持ちになった悪党と見なしていました。もしイエスが『搾取者、裏切者、降りてきなさい。こちらに来て、話をつけよう』と言ったなら、人々は喝采したに違いありません」

しかしイエスの言葉と行いは、罪人を糾弾するものではありませんでした。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」というイエスの言葉は、罪人との積極的なかわりを求め、周りの人を驚かせるに充分でした。そもそもザアカイ自身がその言葉に驚き、信じられなかったことだと思います。

教皇様はそのイエスの言葉と行いを、「神は過去の過ちにとらわれるのではなく、未来の善を見据えます。イエスはあきらめて心を閉ざすのではなく、つねに心を開き、新しい生活空間を絶えず切り開いてくださいます。・・・イエスは（ザアカイの）その傷ついた心を見て、そこに行かれます」と指摘されました。

わたしたちは、簡単に他者を裁く存在です。あたかも自分により正義があるかのような勘違いをしながら、幾たび人を裁いてきたことでしょう。とりわけこの二年以上、感染症の暗闇の中で疑心暗鬼に捕らわれたわたしたちは、不安のあまり寛容さを失い、簡単に他者を裁いては自らの心の安定を取り戻そうとしています。他人を裁くときに、わたしたちの口からでる裁きの言葉は、わたしたちの心の反映です。裁く心に、果たして愛は宿っているのでしょうか。そのようなとき、わたしたちはイエスがザアカイに取った態度、すなわち断罪という「過去の過ちに捕らわれるのではなく、未来の善を見据え」た

行動を自分のものとしたいと思います。なんといっても、「自分の計る量りで計り返される」のだということを、わたしたちは心に留めておかななくてはなりません。

1987 年に開催された福音宣教推進全国会議の答申を受けた司教団の回答である「ともに喜びをもって生きよう」には、「社会の中に存在する私たちの教会が、社会とともに歩み、人々と苦しみを分かち合っていく共同体となる」ための一つの道として、「裁く共同体ではなく、特に弱い立場におかれている人々を温かく受け入れる共同体に成長したい」と記されています。あれから 35 年が経過したいま、教会共同体はどう変化してきたでしょうか。

教皇様は同じ事を呼びかけるために、しばしば「連帯」という言葉を使われます。わたしたちの共同体には、連帯のうちに支え合う心があるでしょうか。それとも自分の立場を主張して、他者を裁き、排除する共同体でしょうか。

昨年 2 月 10 日の一般謁見で、祈りについて教えた教皇様は、こう述べています。

「祈りは、相手が過ちや罪を犯しても、その人を愛する助けとなります。どんな場合にも、人の行いより、その人自身の方がはるかに大切です。そしてイエスはこの世を裁くのではなく、救ってくださいました。・・・イエスはわたしたちを救うために来られました。心を開きましょう。人をゆるし、弁護し、理解しましょう。そうすれば、あなたもイエスのように人に近づき、あわれみ深く、優しくなることができます」。

いま、この社会にあっては、イエスのいつくしみのまなざしを具体化することが必要です。